# ひよくれんり 3

#### もくじ

ひよくれんり3	5
プロローグ 〜奥様の悩み〜	6
指を絡めて、寄り添って	11
バーベキューと空の星	30
初めてのお盆	46
お祭りグルメと浴衣でホニャララ	58
夏の終わりの線香花火	89
秋の味覚と奥様の噂	97
放課後ミルクティー	112
敵情視察中	122
動悸息切れの理由	134
知らないふりはもうできない	152
仲良し夫婦のススメ	166
エピローグ 〜夫婦喧嘩は犬も食わない〜	203
番外編 奥様の弟 2	245
シスコン弟と義兄の攻防一回戦	246
シスコン弟と義兄の攻防インターバル	254
シスコン弟と義兄の攻防二回戦	260
番外編 宗憲君の話	275

ひよくれんり 3

6

私は、彼に相応しい人間なのかな……?正宗さんと結婚してから……ううん、出 出会ってからずっと、 胸に燻っている不安。

よくある。 二人で街を歩いていると、たくさんの女の人が正宗さんに熱い視線を向けている、

うん、わかる。 わかるよ……。 だって正宗さんは、 とっても素敵な人だか

そしてその視線が隣にいる私に移ったとき、決まって「どうしてこんな人と?」という顔をされる。

被害妄想? ううん、事実だ。

誰だって、イケメンの隣に十人並みの女が歩いていたら『不相応』って思うもの。

二頭立ての馬車で、凛々しい白馬の隣によぼよぼのロバがいたら「あれ?」って思うでし ショーケースの中で、お高い宝石の隣に石ころが並んでいたら「え?」って思うし、 薔薇の花と

雑草が花瓶に一緒に活けられていたら「なんで?」って思うでしょ!

つまりはそういう意味なんでしょ? わかってる、わかってるよ!

誰よりも私が一番、 「私なんかで、 いいのかな」って感じているんだから。

柏木千鶴と旦那様の柏木正宗さんは、去年の春にお見合いで出会った。

それから交際を始め、プロポーズされたのが八月。入籍したのは、十一月のことだ。

現在私たちは、正宗さんが亡きお祖父様から譲り受けた、一戸建ての日本家屋で暮らしている。

縁側のある日本家屋で過ごしたい……が中学生の頃から夢だった私には、まさに理想の環境です。

そして性格もとっても穏やかで優しい。 高校教師である正宗さんは、長身で、さらさらの黒髪で、眼鏡がよく似合う(ここ重要)、イケメンだ。

私なんかにはもったいないくらい素敵な人だ。いや、妻の欲目じゃないですよ! そんな正宗さんとお見合いの末にスピード婚をした私は、友達からよく『棚から牡丹餅婚』と挪・ 事実です。

しぐらだったし。そのうえ、仕事は本屋のパート。親のすねかじりなんて言われても、反論できな だって三十路を前にして、三次元の男の人と恋愛する気なんてさらさら起きず、 そんなある日、突然お見合い話が舞い込んで……そしたら、なんとストライクど真ん中 でも、腹は立たない。自分でもその通りだと思うから。 オタク街道まっ

正宗さんと出会えたことは、私の人生において最大の幸運だったと言っても過言ではない。

な外見の正宗さんがやってきたのだ。

人となら、 どんな困難も乗り越えていけるって確信したのは、 結婚してからしばらく経った、

8

まうのです!) で仲良さそうにしていようものなら、 クで腐女子なのです。男同士の恋愛が大好物です! 二次元はもとより、三次元でも男の人が二人 そして、 私の腐った趣味のことを知っても、 頭の中で、 気持ち悪がらず受け入れてくれた。 人には言えないようなあらぬ妄想を繰り広げてし (実は私、 オタ

さんが教えてくれた。 こうやって少しずつ互いのことを知っていって、夫婦の絆は深まっていくんだって。 あのとき正宗さんが言ってくれた言葉や、抱きしめてくれた腕を、私は一生忘れない 腐バレしたときのことを思い出すと、今でも血の気が引いたり、顔が真っ赤になったりしますが…… 知られたら、ドン引かれると思った。最悪の場合、離婚されると思ってずっと隠していた。

ことを求めてくれる。 私を気遣ってくれる。休みの日にはいろんなところへ連れて行ってくれるし、その……夜も、 料理を作ればなんでも『美味しいです』って言ってくれて、お仕事がとっても忙しいときにも、 私の

ずかしいぃ!)日が来るなんて、 腐女子の私が恋をして、 男の人をこんなに愛しく思い 思いもしなかった。 (恥ずかしい!)、 そして、愛される

。棚から落ちてきた牡丹餅を、けして落とさないように。にないまをできた。紫から落ちてきた牡丹餅を、けして落とさないように。こんなに素敵な旦那様と結婚できた幸運を、彼と一緒に暮らす日々の幸せを、 私は噛み締めてい

#### でも……

旦那様が素敵であればあるほど、不安は募るばかりなのです。

私なんかでいいのかなって。

になったけど、まだまだだ。 チビだし、胸も……大きくない。顔だって十人並みだし、家事も独身時代に比べれば少しはマシ

脊髄反射というか……、考えるより先に妄想しちゃうというか……。とにかく、 性格だって、すぐ調子に乗るし、前向きすぎる一方で、 脳みそは相変わらず腐っていて、 旦那様とご友人とで妄想しちゃったりもする。こればっかりは 落ち込みやすいし。 すぐパニックになっ やめられない。

# と、とにかく……!

て暴走するし……って、自分の短所を挙げていたら、

なんか泣けてきた……

私なんかが、正宗さんの妻でいて良いのかなって、 思わずにはいられないのです。

え ? お前今さらなに言ってんだ、って?

前にも似たようなことで悩んでなかったか? って?

うん。 わかってる、わかってるよ……

頭の中で整理はできていても……ふいに、

そんな不安を感じてしまうんだ。

わずにはいられないんだ。 いつか呆気なく、失ってしまうんじゃないかって――だってこの幸せは、なんの努力もせずに手に入れたものだから。 いつかこの手を離れて、 もっと相応しい人のところへ行ってしまうんじゃないかって、そう、

思

10

## 指を絡めて、 寄り添って

それから、正宗さんに腐女子趣味がバレたのも、この夏でした。あのときは本当にパニクったな 初挑戦した家庭菜園が豊作で、夏野菜料理のレパートリーも増えたし、海水浴をしに海にも行った。 正宗さんと結婚して初めて迎えた夏は、本当にいろんなことがありました。

それ以外にもたくさん、 夏の思い出があるのです。

あれは、 七月の末のことでした。

目の前には、蒼い光を放つ大きな水槽が広がっている。

そう、私と正宗さんは今、水族館で、デ、デート中でありますっ! そして水の中を気持ち良さそうに泳ぐのは、多種多様な魚たちだ。

うか?』って言って下さいまして…… いテレビの前で、『ほあああ! ペンギンやイルカ、今年の春に生まれたというアザラシの赤ちゃんがあんまり可愛いから、ついつ 水族館に行くきっかけになったのは、昨日見た夕方のニュース番組。ここの水族館を特集していて、 か、可愛いー!』と騒いでいた。すると、正宗さんが『見に行きましょ

11 ひよくれんり3

でも、並んだ甲斐はあった! ペンギンも、アザラシの赤ちゃんも、水族館は昨日のニュースの効果もあってか、大混雑です。入場するだ 入場するだけでも結構時間がかかった。 とっても可愛かったよ!! 12

(はぁー。やっぱり良いなあ、水族館)

水族館、大好きなんですよー! はしゃぎすぎてすみません!

くる。 水槽の中を自由に泳ぐ魚たちをじっと見ていると、 自分も一緒に泳いでいるような気分になって

魚たち、気持ち良さそうに泳いでるなー。

「あっ、正宗さん。あれイワシですって」

私はプレートの説明文を見て、 今目の前で泳いでいる魚の群れがイワシであることを知る。 イワ

7

なかなか重ならなくて、なんだか変な感じ。 スーパーの鮮魚コーナーで見るイワシと、 こうして群れになって悠々と泳いでいるイワシの姿が

でも、そうだよね。食卓に上る魚も、 もとはこんな風に海を泳いでいたんだよね。

「……美味しそう……」

光を反射してキラキラと輝く、

ぷりぷりとしたお魚。

なんて綺麗で、

うーん。それにしても……

|......美明しそう......

はっ! つ、ついつい本音が……

隣を見ると正宗さんは、口元を押さえて肩を震わせている。

どんだけ食欲旺盛なの! わ、笑っていらっしゃるよおおお! 我ながら、 自分‼ なんてアホなことを言ったんだろう! もう!

い、今の発言取り消したい!! リセット!! セーブポイントからロードし直して、違う台詞を選

択したい!!

「ここのレストランで魚料理、食べられると思いますよ」

「……ふあい」

現実に、セーブ&ロード機能は無い。

知ってても、探してしまう、ゲーム脳……(あ、一句できた)

この水族館は海に面していることもあって、 館内のレストランでは、 新鮮なお刺身が食べられま

お魚を見て、 お魚を食べる。ちょっとシュールだけど、 海の幸は大変美味しゅうございまし

たっ!!

やっぱりお魚は、新鮮なのが一番だよねー-

微笑ましげな顔で私を見ていて、 「うまうまぁ~」って上機嫌に食べていたら、正宗さんが食事中のハムスターを見るような 胸がドキドキしてしまいました。

美味しいお魚に舌鼓を打ち、 ソフトクリームなんかもいただいちゃって、 お腹を満たした後、

賞を再開する

源さんがいた。(名前、渋すぎでしょ……! ちょうど今、 お客さんで賑わっている目の前の水槽には、この水族館の人気者の一人、 でも、そこがまた可愛い!) ラッコの

14

ラッコ。可愛いよねラッコ……!!

どうやら、ちょうど餌やりタイムらしい。だからこんなに人が集まってるんだなあ

割って食べるやつ。 ラッコの食事シーンというと、やっぱりあれだよね。 お腹の上でこう……、 カカカッ!

一生懸命で可愛いんだろうなあ……

私はわくわくと、期待に胸を躍らせてそのときを待った。

の、ですが。

「えっ!?」

ラッコの源さんは、 係のお姉さんから渡された貝を受け取ると、ちゃぽんと水の中に潜り……

ガンガンガン!! と、 まるでヘビメタバンドのドラマーのように、 床にそれを激しく叩きつけ始

めたのです。

え、ええええ?!

ラッコって、 貝をお腹の上に載せて、 石で割るんじゃないのおおおおり

た、確かに、 そんなまどろっこしいことをするより、 床に叩きつけた方が早いのかもしれません

が、様式美……というものがですね。

呆然とする私を尻目に、源さんは貝をちゅるりと食べて、二つ目を係のお姉さんにねだっている。

げ、源さああああああああんっ!! おかわりを要求している場合じゃないよ!!

お前は今、ここに集う子供たちの夢をだな(そして大人の夢もだな)、 奪ったのだよ!!

ラッコはお腹で貝を割る、と思ってたのに!

「……くっ。ラッコの世界にも、合理化の波が……」

っ ! !

思わずぽつりと呟いたら、またも隣の正宗さんが口元を押さえて肩を震わせていた。

館内アナウンスを聞いて、屋外のプールに向かった。 ちょっと腑に落ちないラッコの食事シーンを見た後、 私たちはイルカのショー が行われるという

「楽しみですねえ、正宗さん」

はい」

ちあげた。 て待つ。私はイルカの姿を写真に収めようと、鞄からスマートフォンを取り出してカメラ機能を立 残念ながら、すでに後ろの方の席しか空いていなかったんだけど、それでもわくわくしながら座っ

に呼び上げると、 そして大きな拍手と共に始まった、イルカのショー。 それに応えるようにイルカが大きくジャンプするー 係のお姉さんたちがイルカの名前を高らか

わあ!

イルカ。あんなに高く飛べるんだ!

水しぶきを上げながら、宙に舞う艶やかな体!

思わず見入ってしまい、シャッターチャンスを逃してしまった。 写真を撮る暇なんて、 なかった。 でも、イルカたちのショーは次々

よう!

ええい!

こうなったら、スマートフォンの画面越しに見るより、

この目にしっかりと焼きつけ

「すごいすごい! 興奮した私は、 そう隣の正宗さんに話しかける。 すごいですねえ、正宗さん!」

「はい。すごいですね」

正宗さんは微笑みを浮かべて、 頷いてくれた。

「……っ」

その微笑に、胸がトクン……と高鳴った。

正宗さんの些細な仕草にいちいち、ときめいてしまう。 なんだろうこれ……。 結婚してしばらく経つのに、 気持ちは出会って間もない頃と変わらず、

私は今も、 旦那様に恋してるみたい。

って、な、 なんか照れるな……

でもそれは、 疑いようのない真実だった。

ショーはあっという間に終わってしまい、 人々の流れに乗って館内に戻る。

もう全部のエリアを見てまわったから、 後はショップに寄って帰るのみだ。

それにしても……

(うう……、人でいっぱい……)

イルカショーを見ていた人たちがそのまま館内に流れてきたから、 すごく混んでいる。 通勤ラッ

シュ時の満員電車のよう。

最初に中を見てまわっておいて良かった。 こんな状況じゃ、 人波に逆らうことなんてできないも

んなぁ。

正宗さんの姿を見失わないように、 必死に歩いていたら……

手に、温かいものが触れた。

斜め前を歩く正宗さんを見ると、 こちらを振り返って微笑んでいる。

私がはぐれてしまわないように、 手を繋いでくれている。

もう夫婦なのに……

とっくに一線越えてんだろって、思われるかもしれないけど。

ぎゅ っと繋いでくれる手が嬉しくて、 私はなんだかくすぐったいような、 温かいような気持ちに

赤くなってしまった頬を隠すようにうつむくと、正宗さんが指をするり、 と私の手に絡めてきた。

18

しっかりと、互いの指と指が絡まっている。

これは……いわゆる、こ、恋人つなぎってやつだ!

よりいっそう、正宗さんの体温が伝わってきて、心臓がバクバクする!

ど、どうしよう……!

・・・・・大丈夫ですか? 千鶴さん\_

゙゙.....はっ、はひっ.....」

動揺のあまり、声が上ずってしまった!

私たちはしっかりと手を繋いだまま、 人混みを抜けてようやくショップに辿り着いた。

わぁ、いろいろあるなぁ~。

実家やご近所にもお土産を買って帰ろう。

られている棚の前。実際に見たアザラシの赤ちゃんは、 お土産にちょうどいいお菓子を選び、 次に向かったのは、 白い産毛は抜け落ちちゃってたんだけど、 赤ちゃんアザラシのぬいぐるみが並べ

ぬいぐるみは真っ白もふもふでとっても可愛い!!

あの白くて柔らかーい毛に顔を埋めて、 もふもふしたい! もふもふ!

頃なのはやっぱり小サイズだけど、ちょっと物足りないなぁ……。抱きしめるには小さいし、 赤ちゃんアザラシのぬいぐるみには大・中・小とサイズがあって、どれも可愛い。うーん、 お手

力的……っ。でもお値段がなぁ……うーん…… いってストラップとして使うには大き過ぎる。ここは中サイズにしておく? でも、 大サイズも魅

「……可愛いですね」

どうしよう、どうしようと悩んでいたら、隣の正宗さんがぽつりと呟いた。

正宗さんの同意を得られたのが嬉しくって、俄然テンションが上がってしまった。 そうでしょう!! この可愛らしさ! もはや犯罪レベルですよね!

思わず、

だ手をぶんぶんと振ってしまう。

赤ちゃんアザラシって、

なんでこんなに可愛いんでしょうね!」

こうなったらもう、奮発して一番デッカイの買いますか

可愛いは正義ですしね!!

いえ、そうではなくて」

「 え ?」

そうではない?

「……千鶴さんが、 可愛いなあ…

え....、 あ·····? え?

えええええええ!!

「かっ、 かわっ!!」

はし

正宗さんは頷いて、微笑む。

ちょ、だめえええ!!

その顔は、だめえええええ!目がっ、目がああ!

正宗さんの優しくて、美しい微笑に、本当に目が潰れるかと思いました……

寝転がっていた。 その日の夜、今日買った赤ちゃんアザラシのぬいぐるみ (正宗さんは現在お風呂です) 大 を抱いて、 私は一人ベッドの上で

そして、もふっ、もふっと、思う存分ぬいぐるみを撫でる。

なんだこの気持ち良さ!! たまらん!!

抱き枕にちょうど良いサイズだし、普通の枕としても使えそう……

可愛いだけじゃなく実用性もあるなんて、良い買い物したなぁ

「ふぁ……」

ふわっふわのぬいぐるみを愛でているうちに、だんだん眠くなってきた。

すっごく楽しかったけど、やっぱり人混みで疲れたなぁ。 帰りの電車も満員だったし……

(ん……でも、正宗さんがまだ……)

正宗さんがお風呂から上がってくるまで待っていようと思ったのに、 結局私は睡魔に負け、 ぬい

ぐるみを抱いたまま寝入ってしまった。

\* \*

「ふぅ……」

熱いシャワーを浴びた後、 俺は濡れた髪をバスタオルで拭きながら二階に上がった。

つろげてしまう。 夏はシャワーだけで済ませることが多い。それでも湯上がりは暑くて、 ついつい浴衣の襟元をく

そして寝室に入ると、先に風呂を済ませていた千鶴さんがベッドの上で丸くなっていた。

薄手の夏用布団の上に寝転がっている。 その腕の中には、 今日買ったばかりのアザラシの ゆいぐ

るみ。

.....つ

俺は思わず口元を押さえる。 ぬいぐるみを抱いて、 くうくうと無邪気に寝息を立てる千鶴さんが、

あまりにも可愛らしくて……

さらに、ワンピースタイプの寝巻の裾がめくれて、 白い太股が大胆に露出している。

なんだろう……。理性を試されている気分だ。

「……千鶴さん?」

布団の中に入った方が良い

彼女の肩をゆすって声を掛けてみる。 このまま寝かしてやりたい気もするが、 きちんと

千鶴さんはゆっくりと目を開けた。

「……んにゃ」

すぐに目を瞑ると、 相好を崩して、 ぬいぐるみをさらにぎゅうっと抱きしめる。

·.'

その無防備な笑顔に、 俺の理性は音を立てて崩れていった。

こんな風に煽る、 あなたがいけないんですよ……?

俺は彼女の腕の中から、 ぬいぐるみを奪い取った。そして「ごめんな」と小さく呟いて、 ぽいと

床に放り投げる。

「んん?」

俺は眼鏡を外してヘッドボードに置くと、彼女の体の上に覆いかぶさって、それまで腕の中にあった物が無くなって違和感を覚えたのか、千鶴さんが身 千鶴さんが身じろぎする。

わずかに開いている

唇に自分の口を重ねた。

「ん……んんっ……」

温かい口内に舌をねじ込む。 彼女の口の中は、 ほのかにミントの味がした。

歯磨き粉を使っている俺の口の中も、 同じ味がするのだろうか。

「ふぁ……っ。 :っ\_\_

「はぁ……っ。千鶴さん……」

「……ぇ……。正宗……さん……?」

目を覚ました千鶴さんが、驚いて目を丸くしている。

俺を見上げる瞳はすでに潤み、 頬はうっすらと上気していた。

彼女の髪を耳にかけてやると、俺はそっと囁いた。

-....起こしてしまって、 すみません。 でも、どうにも……」

あなたがあまりにも可愛らしくて、我慢できませんでした。

そう告げると、彼女はかああっと頬を赤らめる。ああ、 そんな初心なところも可愛いです。

「そっ、そんな……ことは……ない……かと」

しどろもどろに、 彼女は言う。

「そんなこと、ありますよ。ほら」

俺はぐっと、彼女の太股に腰をあてる。

「あっ」

硬いモノの感触に、 彼女は俺の欲情を察したのか、 小さく声を上げた。

あなたが可愛いから、 俺のココはこんなになってしまったんです。

千鶴さんが恥ずかしそうに目を逸らす。 そんな仕草すら愛しくて、 俺は再び彼女に口付けた。

#### 「んっ」

千鶴さんも拒まずに舌を絡めてくる。結婚したばかりの頃は、 キスをするのも戸惑っていたが、

この頃は自然に受け入れてくれるようになった。それが嬉しい。

あ……っん……っ。 んんう……」

「……つ、あ……」

名残惜しくも唇を離すと、二人の間を銀糸が伝った。

身を離し、彼女の寝巻を脱がせる。千鶴さんは寝るときはブラジャーを着けない。 だから、

ミソールと下着を脱がせば、あっという間に華奢な裸体が露わになる。

日に焼けて、水着の跡がうっすらと残った肌。俺は思わずこくりと喉を鳴らした。

|正宗さん……| そして自分も、 浴衣と下着を脱ぎ捨てる。そして邪魔な薄手の布団も、 ベッドの下に落とした。

裸になった俺に、千鶴さんが手を伸ばしてきた。その手をとって、指先に口付ける。

「あっ」

指先も感じるらしい彼女の指を口に含んで舐める。

なぜか、 彼女の体は隅々まで甘く感じられる。

「んっ……あっ……」

口から千鶴さんの指を外した後は、 本能のままに彼女の胸に唇を寄せる。

ふわりと柔らかくて、 ちょうど俺の手に収まる彼女の胸を揉みながら、頂を口に含んだ。

### 「あッ……」

びくっと震えた。 ぷくりと勃ち上がった頂を、ころころと飴玉のように転がす。 そのたびに、千鶴さんの体がびく

んだ。 そしてそっと右手を彼女の秘所に這わせれば、そこはもうしっとりと濡れている。 くちゅり……と水音を立てて指をナカに挿し込むと、俺の指をねっとりとした花びらが、 包み込

## 「……んっ、 んんつ……」

そうして胸を愛撫しながら秘所を指で責めると、 胸の頂を食んで、 軽く引っ張る。ときには歯を立てて、 徐々に水音が大きくなっていった。 ときには優しく舌で捏ね上げるように。 それだけ滴が

溢れて、俺の指に絡まっているのだろう。 ナカを責める指を二本、 三本と増やす。

「……やっ……あっ……」

千鶴さんは目をぎゅっと瞑って、いやいやと首を振った。

だがそんな仕草とは裏腹に、熱を帯びた彼女の肌は女性特有の色香を放ち、 俺を誘っている。

しとどに濡れる蜜壷も、 とろとろに蕩けていた。

……そろそろかなと、俺はさらに指の抜き挿しを激しくする。

「や……ぁ……っ……やああっ!」

ぐちゅぐちゅっと泡立てるように指で責めれば、 千鶴さんはびくんっ! と背を反らせて、 絶頂

を迎えた。

彼女はそのまま、はぁはぁと荒い息を吐いて、ぐったりとベッドの上に倒れ込む。

宛がった。 俺はうっすらと汗ばむ千鶴さんの額に口付けてから自身を掴むと、 果てたばかりの彼女の秘所に

「んっ」

れそぼった割れ目に自身を擦りつけた。 千鶴さんはわずかに声を上げ、 身を震わせる。 俺はすぐには彼女のナカに入らず、  $\vdash$ ロト 口と濡

「ぁ……っ、ああっ……」

果てたばかりの体には、 そんな動作さえ刺激になるらしい。

千鶴さんの口からまた、 吐息と共に甘い嬌声が零れる。

まだ完全に勃ち上がったとはいえない自身を、 なにより潤んだ瞳の千鶴さんが、「まだ……?」と乞うような視線で俺を見上げてくるのが、 そうやって擦りつけることで、 俺も快感を得る。

まらなかった。

焦らすようにゆっくりと腰を振り、 彼女の胸をやわやわと揉む。

「んっ……あっ……」

きゅっと目を瞑り、 快感を堪えるようにしている彼女は、 いつまで経っても初々しくて、 可愛い。

「……挿れ、ますよ……」

そう言うと、千鶴さんはこく……と頷いた。

腰を進め、 奥まで収まった俺の性器を、千鶴さんの花びらが熱く締めつけてくる。

何度も交わっているうちに、 彼女の体は俺の体にぴったり馴染んできたような気がする。

......男冥利に尽きるな。

「んっ……」

ゆっくりと抽送を繰り返す。 あまり激しくはない動きに、 千鶴さんは甘い吐息を吐いた。

「んっ……は……ぁ……っ」

その声が、俺の心を快楽に染めていく。

こうして彼女と一つになれることが嬉しくてたまらない

そして欲求のままに、彼女の太股を掴み、 激しく腰を打ちつける。

「ひゃっ、 あつ。 ああっ……」

ぱちぱちっと、汗ばんだ肌と肌とがぶつかり合う。

「千鶴さん……っ、千鶴さん……っ」

「ぅあ……っ……正宗……さぁん……っ」

そして、 涙を流しながら、 今日、 水族館で指と指とを絡め合ったようにぎゅっと繋いだ。 彼女は俺に向けて手を伸ばしてきた。太股から手を離し、 彼女の手を取る。

「あっ……正宗さ……っ………正宗さぁっ……ん」

28

(ふ、ふおおお……)

現在、時刻は深夜一時。

私は現在赤ちゃんアザラシのぬいぐるみを腕に、 ま、 まさ……正宗さんの胸の中にすっぽり

抱かれております……!

え、ええと、ですね。あの、正宗さんと致しました後……

二人でもう一度シャワーを浴びて、寝巻に着替えて……床に転がっていたぬいぐるみを抱き枕と

して使おうと、腕に抱いて布団に入りましたらば……

正宗さんが無言で、私の体を抱き寄せて、ぎゅって……したのです。(恥ずかしい!)

困惑する私に、正宗さんはふわりと微笑んで、『俺も抱き枕が欲しいです』

あ、暑くないですか?まだまだ季節は夏ですよ。

正宗さん……?』

って、おっしゃって……

抱き合って眠ることに。

(だ、抱き枕って私か!!)

結果、向かい合う形で間にぬいぐるみを挟み、

正宗さんはすうすうと、寝息を立てておられます。気持ち良さそうです。

で、でも……

(私はドキドキして、眠れないよおおおおお!)

……とか言っていましたが、その数分後にはうつらうつらと舟を漕ぎ始め……

結局、爆睡……してましたぁ!

うう……。朝起きてみたら、ぬいぐるみによだれが……っ

思わず絶叫しそうになりました。

間抜けな寝顔を見られたのかと思うと、恥ずかしくって……! それにぬいぐるみ! 買ったば

かりなのに即洗濯とか! ごめんよラッシィイー! (アザラシなので、ラッシー。今決めた)

お前があんまりふわふわで、気持ち良いからさあああああありのいつい、よだれがっし

かふかになったラッシーは、この日から私の昼寝のお供として大活躍するのでした。 恥ずかしいやら、申し訳ないやら。 泣く泣く手洗いした後、お日様の光をたっぷり浴びて再びふっ

だって、ふわっふわのラッシーを抱きしめていると、気持ち良く眠れるんですもんー

そしてその魅力にとりつかれたのは、どうやら私だけではないようで……

身悶えする私なのでした。 正宗さんがラッシーを抱いてお昼寝している姿を目撃し、 (\) " o た、 たまらん!!)と、 激しく

# ハーベキューと空の星

幸村真さん、幸村先生の恋人の水無月朧さんと四人で高原に遊びに来ていた。ඖ 八月になって間もないある日のこと。私は正宗さんと、正宗さんの職場の同僚でご友人でもある 夏だということを忘れてしまいそうなほど涼しい風が、 林の中を爽やかに吹き抜けていく。

を想像しただけで、ご飯三杯はいけます! たらしい。むふふ、 正宗さんと幸村先生は中学時代からの友人で、幸村先生は昔から正宗さんの家に泊まりに来てい なんと、家には幸村先生のお泊り用の浴衣があるのですよ! 二人の学生時代

格から、生徒さんにとっても慕われているんだとか。 ちなみに現在幸村先生は、正宗さんと同じ高校の養護教諭をされている。 明るく、 人懐っこい性

そんな幸村先生の恋人は、 身近に素敵なBLカップルがいるんですから! 女性ではなく男性です。ええ。腐女子の私には幸せこの上ない環境で

料亭だった。ちなみに幸村先生と朧さんは遠い親戚らしい。お二人の馴れ初めとか、 り聞いてみたいなぁ…… ご実家は高級料亭を経営されている。 水無月朧さんは、美大で日本画を学ぶ大学院生。ハッと目を惹くような中性的な美貌の持ち主で 私が初めて幸村先生を紹介してもらったのも、 いつかじっく 朧さんの家の

お二人はよく家にご飯を食べに来たり、 お酒を飲みに来たりして、 先月は四人で海にも行ったの

そして今回も、こうして四人で遊びに来ました!

ここは日本で最も有名な、白樺の林に囲まれた別荘地です。

そうです! 軽井沢です!

綺麗なお嬢様が白いワンピースを着て「うふふ~」と優雅にお散歩していそうなイメージの(え?

考えが古い?)、あの軽井沢ですよ!

いやあ……、最初に幸村先生からお誘いを受けたときはびっくりしましたよ。

『ちーちゃん。来週予定空いてる? 暇ならさ、 一緒に別荘に遊びに行かない?』

別荘に遊びに行くとか、どこのセレブですか?? って、軽く言うんだもん。思わず『ホワッツ!?』って口に出しちゃったよ。 って思いましたよ。

それで最初は、 水無月家は料亭以外にもいくつも飲食店を経営しているらしいし、 朧さんのおう

ちの別荘かな。もしくは、貸し別荘? と思ったのですが……

『えつ!?』 『今年はウチの家族、 誰も使わないって言うからさー。 なにも無いところだけど、 涼しいよ?』

まさかの……! 幸村先生のおうちの別荘でした!

朧さんいわく、『真んちは、ウチより金持ってんぞ』だそうです。

セレブの親戚はセレブなんですね! イケメンの親友がイケメンなのと同じですかね (違う)

軽井沢! そして人生初の、別荘にお泊りです! びっくりなお誘いではありましたが、 お言葉に甘えて遊びに来ましたよ。 32

幸村先生の愛車で、夏休みで混み合う道路をのんびり走り、 本日の宿泊先に辿り着いた。

いる。屋根の出窓も可愛い! 一階部分はオレンジ色の煉瓦造り。そして二階部分は深みのあるブラウンの木材が板張りされて幸村先生のおうちの別荘、すっごく素敵です……!

広い。システムキッチンもシンプルで使いやすそう! 外観だけじゃなくて、内装もとっても素敵だった。真っ白い壁のリビングは吹き抜けで、すごく 家具はほとんどイタリア製なんですってー

私は口をあんぐりと開けっぱなしでした。

こんなところに泊まれるなんて、ゆ、 夢のよう…

「正宗、 いつもの部屋で良いよね?」

「ああ」

幸村先生と正宗さんの親しげな会話に、 私の耳がぴくり!

正宗さんや朧さんがこの別荘に泊まったことがあるってのは聞いてたけど、 っい つもの部屋」 つ

て言い方が、なんか萌える!

……と一人でニヨニヨしていたら、朧さんが小馬鹿にしたような顔でこちらを見ていた。 うつ! 実は朧さんには、一番最初に私が腐女子だってことを見破られたんだよね……。 その後

予期せぬ形で正宗さんにもバレ、一悶着あり……

ええ、あのときは本当に、朧さんにご迷惑をおかけしました、すみません・

きっと今も、私が正宗さんと幸村先生に萌えてることがバレバレなんだろうなあ……

して萌えている、ということは知られていないのです。というか、知られてはいけないのです! いかんいかん。正宗さんには腐女子ってことはバレたけど、正宗さんと幸村先生であらぬ妄想を

緩んでいた顔を、キリッとさせる。

けれど引き締めた顔は、 一つ一つ案内されたベッドル ームで「きゃあー!」という歓声と共に、

たるんでしまった。

まる部屋の壁は、 ルな木製。どうやらこの部屋は北欧風にまとめられているようだった。 白で統一されていた一階とは違い、各部屋はそれぞれ趣の異なる内装だった。私と正宗さんが泊 落ち着いた深い青色に塗られている。天井とカーテンは白。家具は全てナチュラ

落ち着く日本家屋も大好きだけど、素敵な洋風のお部屋にもときめく…

いるらしい。 一階にあるジャグジー付きの大きなお風呂とは別に、 そう正宗さんに教わった私は、 さっそくシャワールームの扉を開けた。 各部屋にも小さなシャワール (ホテルでも、

真っ先に浴室の扉を開けたがるタイプです)

34

洋画に出てくるシャワールームみたい! お、お洒落-

がはしゃいでいる私をにこにこと見ていることに気づき、 「可愛い!」「素敵!」と連呼しながら、私は部屋の中をうろうろと見てまわり続けた。 はっと我に返るまで。 正宗さん

になった。 そんなこんなで大興奮の一日目の夜は、 煉瓦造りの広いテラスに出て、 バーベキューをすること

かも冷えたビールに、 別荘の管理人の方が、すでにバーベキューセット一式と材料を用意して下さっていたのです。 スイカまで!

しい肉と野菜をお届けするバーベキュー奉行なのです!け、けして自分が一番最初に食べたいからとかじゃないですよ! なんだか至れり尽くせりで申し訳ない。 せめて焼くくらい は……と、 今日の私は、 私はトング片手に腕まくり。 みなさんに美味

家庭用バーベキューコンロの炭の火は、 正宗さんと幸村先生がつけてくれた。

わくわくしますね……!

ステンレスの網の上に、食材をどんどん載せていく。

結構大きなコンロだからなあ、 いっぱい載せられるなあ。

薄いお肉は、 お肉がジュージューと焼ける音がして、 油断するとすぐ焦げちゃうからね。 いい香りが辺り一面に広がる。 気をつけないと。

「お肉焼けましたよー。どんどん食べて下さいね!」

香ばしく焼けたお肉をひょいひょいと、幸村先生のお皿へ。

タレはお好みでどうぞ!

「ありがとー!」

牛タンはやっぱり、レモンですよね。

あっ、正宗さんが食べたがってた牛タンも、

イイ感じに焼けてますね~

「ハイ! 正宗さん召し上がれ~」

「ありがとうございます」

えへへ……。なんか照れるけど、嬉しいなぁ。

食べる前はちゃんと手を合わせて、「いただきます」。食べた後はちゃんと、「ごちそうさまでし 正宗さんは私がなにか料理を盛ったお皿を渡すたびに、いつもこうしてお礼を言ってくれるのだ。

た」って言ってくれる。 そんな正宗さんが、私は……だ、 大好き……だ。

……って! ついつい惚気てしまった。

それにこの新鮮な空気の中で食べると、 よーし! この調子でどんどん焼きましょう! わ、私も牛タン食べよう! んんー!! お肉も野菜も、 美味しいー!! この独特の食感が、 いつも以上に美味しく感じられるなあー。 たまりませんなー!

ん、良い香り! 網の上には、牛カルビに牛ロース、サーロイン。それから牛タン、豚トロ。 お肉の焼ける香りって、どうしてこんなに食欲をそそるんだろうなー。 脂が滴り落ちて、うー

たまらん!

それから野菜もたっぷり! 鶏肉もあるから焼こう! 輪切りにしたトウモロコシ、ピーマンにニンジン。シシトウにエリ 他にも、 鶏のナンコツやハーブ入りのソーセージまであるー

ンギに、シイタケ。プチトマトも!

プチトマトは生で食べるのもいいけど、 軽ーく火であぶって食べると美味しいんだよね

あっつあつだけど、はふはふと食べる焼きトマト、美味です

おっと、タマネギが良い感じに焼けている。焦げる前に食べないと・

んん〜! 焼きタマネギも甘くて美味しい~!!

「朧さん、 お肉のおかわりいかがですか?」

食べごろなお肉を、お皿の空いている朧さんにすすめる

もっと焼け」

はしい。

朧さんはウエルダン派のようです。

べごろだ。

じゃあ、 野菜食べて下さいねーと言って、私は焼けた野菜を物色する。 あ、 あのシシトウとか食

「ん。もらう」

「シシトウ、美味しそうですよ」

正宗さんや幸村先生が、 そんな風に、 ひょいひょいと網の上でお肉や野菜を焼いては、 時々「代わろうか?」っておっしゃって下さるけど、 皆さんのお皿に盛ってい いえいえここは、

この奉行めにお任せを〜

あ、そうだよ海鮮もあったんだ! イカ、エビ、 それにホタテリ

空いたスペースに、どんどん海鮮を載せていく。

殻つきのホタテがぱかっと開いたら、 バターを載せて、 お醤油をたらー

ここが重要なのです。多すぎても少なすぎてもいけないのですー

! 美味しそうー!!

お醤油とバター、そしてホタテの旨味が混ざり合って、 えもいわれぬ良い香り! たまらん!!

早く食べたーい!!

おっと、その隣では鶏肉が良い感じに焼けている!

そして正宗さんのお皿が空いている!

私はトングで鶏肉を掴むと、正宗さんのお皿にひょいと載せた。

「ありがとうございます。 千鶴さんも食べて下さいね」

皆さんのお皿に載せつつも、 しっかり自分も食べてますよ~。

おっと、そろそろ良さそうですね、ホタテ。 私は自分の皿にホタテを載せ、 割り箸でつまんでふー

うまぁー!」

感動的な美味しさです!

醤油とバターの絶妙な組み合わせが……神や-

「千鶴、俺もホタテ食べたい」

「はしい。 熱いんで、気をつけて下さいね\_

朧さんのお皿に、ホタテを一つ載せる。

「ん。……美味い」

ねー! 海に行ったときに食べた魚介も美味しかったけど、高原でバーベキューするのも、

違った美味しさがありますよね

「……これも食べろ」

正宗さんが網の上のピーマンをさっと、朧さんのお皿に載せている。

あれ? 朧さんってピーマンお好きだったっけ?

「!? てっめぇ正宗! いらねーもん載せんじゃねーよ!!」

ああ、やっぱり。家でピーマンを出したときも、いらないって言って、 幸村先生に食べさせてた

もんなぁ。(そして、 私はそれを見てニヨニヨしておりました!)

「野菜も食え」

「食ってんだろーが! シシトウとか

シシトウとか、シシトウとか……ですね。

そういえば朧さん、シシトウ以外のお野菜は一切口にしてないな。

バーベキューなんつーもんは肉を食ってなんぼだろーが! 野菜なんてなあ、 おまけみた

いなもんだろ! それに俺は野菜が食えないわけじゃない。焼いただけの野菜が好きじゃないだけ

どうやら朧さんは、バーベキューの野菜が苦手なようです。 (シシトウは例外)

「屁理屈を言うな。 いいから、ほら。タマネギも甘いから、 食ってみろ」

嫌がる朧さんに、正宗さんは野菜を食べさせようとする。

なにこの父と息子みたいな美味しい光景!!

正宗さんは左手でがっしりと朧さんの肩を掴み、箸で挟んだタマネギを朧さんの口元に持ってい

一方朧さんは必死で、正宗さんの右手を押し戻そうとする。

……箸がなければ、正宗さんが朧さんを押し倒そうとしているように見えるな。ふふっ。

「まぁまぁ、正宗落ち着いて。朧、 食べられるだけで良いよ。 後は俺が食べるから\_

お母さんみたい……!

「お前がそうやって甘やかすから……」

「るせー。 人の嗜好に口出すな」

「朧だって普段は食べられるんだよ。

あああ、 まるで子供の教育方針で揉める夫婦のよう!

美形三人のやりとりに、私は一人、心の中で悶えておりました!!

バーベキュー、 楽しいですねえ!」

いろんな意味で楽しいです……!!

「喜んでもらえて良かったー」

にっこーっと、グラスビールを片手に幸村先生が笑う。 その頬はすでに赤らんでいた。

炭火で焼いたお肉や野菜、 海鮮を肴に男性陣は冷えたビールをグビッと。

私はビールが苦手なので、 梅酒のソーダ割りをグビッと。

ああ……幸せ……

火は熱いけど、 汗をかきながら美味しいものを食べて飲む! ってのが、 たまりませんなぁ

明日は四人でアウトレットに行くのです。だから早く寝なきゃいけないんだけど…… 最後に冷えたスイカを食べて夕食を終えた後は、 お風呂をいただい て早めに部屋に戻りました。

(……眠れない……)

興奮冷めやらず……眠れません!

ふかふかのベッドの上でごろんごろんと寝返りを打つ。

私たちのお部屋はツインの客室なので、正宗さんとは別々のベッドだ。

しいことを考えてるんだ……と赤面する。 いつもすぐ傍にある温もりがないから余計に落ち着かないのかな……はっ、 自分はなんて恥ずか

正宗さんに、「一緒に寝て下さい」って、言う?

いやいやいやいや! そんな甘えたこと言えない……!

「……千鶴さん。 もしかして眠れないんですか……?」

隣のベッドにいる正宗さんが、声を掛けてくる。

はい……!」

ちょうど正宗さんのことを考えていたから、びっくりしてしまった。

**……でも、眠れないのは本当……** 

眠らなくちゃと思うんだけど、 眠ろうと意識するほどに目が冴えてくるんだ。

・・・・・それじゃあ、 少し散歩に行きませんか?」

<sup>'</sup>え……?」

お散歩……ですか? 夜のお散歩:

**俺も眠れないんです。** よければ、 一緒に」

私は二つ返事で頷くと、 がばっと布団から起き上がった。

正宗さんと夜のお散歩なんて、 なんかドキドキする……-

高原の夜は冷えるから、私たちは寝巻の上に薄手の上着を羽織って外に出た。

ちなみに本日の正宗さんの寝巻は、 上下紺色のパジャマ。 普段浴衣で寝ている正宗さんのパジャ

マ姿はレアだ。

<sup>-</sup>わあ……!」

外に出た私は夜空を見上げ、 感嘆の声を上げた。

夜なのに……空が明るい……

私たちが住んでいる街よりも、 ずっとずっと夜空が高く見える。

そして、満天の星!! 綺麗……

「今日は星が良く見えますね」

今夜みたいに、 月が見えない夜の方が星が綺麗に見えるんだって。

月が明るいと、星の光が霞んでしまうから。

ヘえー」

坂を少し上った先に、小さな東屋の見晴らし台があるらしい。綺麗な星空に感動しながら、私は正宗さんに手を引かれ、夜の 夜の高原を歩く。

そこを目指して、 ゆっくりと夜の散歩を楽しむ。

星明かりのおかげで、夜道は思ったよりも暗くない。

レトロなデザインの街灯が等間隔に立っていて、 道を照らしてくれている。

ロマンチックな雰囲気ですねぇ。

そして辿り着いた東屋の木製ベンチに座って、 私たちは一緒に星空を見上げた。

「……あれが、夏の大三角です」

夏の大三角……! 私にも聞き覚えのある星座だ。

正宗さんの指が、 三つの星をなぞる。

思っていたより、 大きな三角形になるんだなあ……

「あれが、 織姫星。こと座のベガです

七夕の、 織姫と彦星。

織姫がいるなら、彦星はどこにいるんだろう? って思っていたら、「彦星はあそこですよ」

正宗さんが指差す。

言葉にしなくても思ったことが伝わったようで、 なんだかこそばゆい

「彦星。わし座のアルタイル」

今日はそれほどはっきり見えないけれど、その二つの星の間を、天の川が流れてるんだって。

「そしてもう一つの星が、はくちょう座のデネブ」

ベガにアルタイル。そしてデネブ。

この三つの星を結んだのが、夏の大三角だって、 正宗さんは教えてくれた。

その他にも、「あの星は……」と説明を続ける。

なんだか意外だった。文系の正宗さんが、こんなに星座に詳しいなんて。

正宗さんが指差す星を、 私も一緒に見つめる。

私なんて、星の名前ひとつわからない。

今夜初めて知った、正宗さんのもう一つの顔。

穏やかな表情に、どこか楽しげな……少年のような笑みを浮かべて、 星空を見上げる旦那様。

(どうしよう……)

……胸がきゅんきゅん……しちゃいます。

(正宗さん……)

「そしてあれが……」

ふるっと、反射的に体が震えて、やっぱり高原の夜は寒いなあ……なんて、思っていたら…… 正宗さんが新しい星を指差したとき、さああっと、涼しい夜風が髪を撫でていった。

····!

「……寒い、ですか……?」

正宗さんに、ぎゅっと……肩を、だ、抱き寄せられました。

正宗さんのあったかい胸に寄りかかる。

すごく安心する。 一番大好きな温もりが、 令 こうして私を包んでくれている。

……も、もう、寒くない……です」

正宗さんが、抱きしめてくれるから……

「……良かった……」

、しかしですね……!

イケメンの胸に抱かれて、星空を見上げるとか……!!

私、どこの乙女ゲーヒロインよ!! ってツッコミつつ、でも……

もう少しだけでいいから、このままでいたいって思いました。

そして私たちは、 再び夜空を見上げ、ただ静かに寄り添って、 空に輝く星々を見つめていた。

45 ひよくれんり 3 44

# **初めてのお盆**

水族館デートに、 高原にお泊り。イベント盛りだくさんだった、 今年の夏。

その中でも特に忘れられない、忘れちゃいけない思い出がある。

それは、二人で初めて迎えたお盆のこと……

八月十三日、お盆は亡くなった人の魂が家に帰ってくる日だ。

私と正宗さんは朝方のまだ涼しいうちに、 柏木家の墓地を訪れた。

お盆ということもあって、他にも多くの人がお墓参りに来ている。 みんな、 家族の魂を迎えに来

たんだろう。

に生えた雑草を抜き、墓石に水をかけて清めた。 正宗さんのお祖父さん、 私は神妙な面持ちで見つめていた。 お祖母さん。 **こ清めた。黒の御影石が水に濡れて、そしてご両親が眠る、柏木家のお草** 柏木家のお墓。 わずかに色を変えるの 私たちは玉石の隙間

お墓を前にすると、心が静かになる。

持ってきた花を飾り、お供え物を置く。 それからお線香に火をつけ、 そっと手を合わせる。

(……お祖父さん、 お祖母さん。 お義父さん、 お義母さん。 ţ 嫁の……千鶴です。 ええと、 おは

ようございます……)

私は心の中で、語りかける。

自分のことを『嫁』と称する機会はあまりなくて、 心の中で口にしただけなのに、 なんだか照れ

くさかった。

(……ええと、今年もよろしくお願いします……? って、なんか違いますよね。すみません……!)

今年もよろしくお願いします、とか、年賀状か!

でもこういうとき、みんなはどんなことを語りかけているんだろう?

そんなことを思いながら、私はたどたどしく、 心の中で話し続けた。

います……大きな病気や怪我をすることもなく、二人で元気に、 (いつも……ええと……見守っていて下さって、 ありがとうございます。 平和に、 私たちは元気に暮らして その……し、

手を合わせながら、今は亡きご家族に報告をして

暮らしています)

(……これからも、見守っていて下さい……)

と最後に語りかけ、私はぱちりと、閉じていた目を開けた。

ひよくれんり3

47

隣を見ると、正宗さんはまだ手を合わせている。

彼は今、 ご家族の眠るお墓を前に、どんなことを想っているのかな……

48

作る予定です。

ご両親をお迎えする日なので、 なんせ、結婚して初めて二人で迎えるお盆。 嫁は張り切っているのです! つまり、 初めて正宗さんのお祖父さんお祖母さん、

「ええっと…」

私は買い物カートを押しながら、あれこれと商品を物色する。

お豆腐安い! これは買いだな。

「正宗さんのお祖父さんやお祖母さん、ご両親はなにがお好きでした……?」

私はサービス品の絹豆腐をカゴに入れながら、隣にいる正宗さんに尋ねる。

お祖父さんたちのお好きだった物を中心に作ろうと思うのですよ。

-.....そう.....ですね......」

正宗さんはふむ……と考え込む。

「祖父は……エビ……が好きだったかと」

「エビ!」

私も大好きですー!! よしエビ買いましょうエビ。

ヘレッツゴー

これを天ぷらに……とかどうでしょう。 おおっと、大きなエビがありますねえ……。ちょっと高いけど、 我が家の家庭菜園でとれた野菜もあるし。 今日は特別な日なので! それと一緒に

をとったお味噌汁……ぜったい美味しいよねえ……。 天ぷらにしましょうか。エビの頭や殼はダシにして、お味噌汁……とかいいですね! よし決定!! エビでダシ

他にも、天ぷら用にイカを買って、マグロとサーモンのお刺身も買って、 お魚コーナーからお肉

コーナーへ移動する。

「あっ! ステーキ用のお肉が安い……!」

〜つ!! 天ぷらにお刺身にステーキ……! これって超豪華トリプルコンボじゃないですか 12 贅になったく

「むむっ……」

で、でもなあ……。 さすがに贅沢しすぎ? 家計を預かる身としては罪悪感もあります。 んし

でもなあ、でもなあ……お盆だしなぁ……

買っても良いかなあ、どうかなあ……って迷っていたら、正宗さんが

「奮発して、買っちゃいましょうか」

……って私に微笑みかけて、ステーキ用の牛肉をひょいっと手に取り、 カゴの中へ入れた。

ですよね! お盆とクリスマスとお正月と誕生日は、 ご馳走食べる日ですもんね!! (違う)

~ ~ ......

さんに話しかけた。 正宗さんとこうして二人でお買い物するのがなんだか嬉しくって、私はにこにこしながら、 正宗

昔からお盆が大好きだったんです」

頃には行かなくなって……。だから、お墓参りとかもあんまり行ったことなくて……」 「うちは父も母も実家が遠くて、子供の頃はよく夏休みに遊びに行っていたんですが、 お盆って、なんかこう……、昔から『特別な日』だったから、わくわくしてしまうんだ。

継いでいる) そうなのだ。私の父は次男なので、 家には仏壇が無い。(両親の実家は、それぞれの長男が後を

だから盆飾りをして……とか、そういう特別なことはやらなかったんだけど……

んです」 「八月十三日は、 母が必ず、 とびっきりのご馳走を作ってくれて……。 それがすごく楽しみだった

私や弟の大好物と、いつもは滅多に食卓に並ばない料理とかもあったなぁ

母の亡くなった祖母(私のひいばあちゃん)が教えてくれた料理なんだって。

しそうに食べていた。きっと、ひいばあちゃんのことを思い出していたんだろう。 母は『手間がかかるけど』なんて文句を言いながらも、『やっぱり美味しいわねえ』って、 懐か

出を語ってくれた。 お酒を口にしながら『お前たちのひいじいさんはな……』って、 ひいじいちゃんとの思い

なった人たちと縁のあるご馳走を楽しみながら、 私にとってのお盆は、ご先祖様の霊を家にお迎えする……というものではなかったけれど、 思い出を語る日だったのだ。

故人の思い出を語る両親を見ていると、 自然と八月十三日が特別な日に感じられた。

なんというか……こう……

だって実感が湧いてくる……というか。 今の自分が、ご先祖様の人生の先に立っているんだって、ご先祖様がいたから今の自分がいるん

い出させてくれる。そんな一日なのだ。 遠く離れていても、日頃はそう感じなくても……たくさんのご先祖様に守られているんだって思

だから……

「今日は、お祖父さんやお祖母さん、お義父さんやお義母さんがお好きだった物を一緒に食べましょ

つ! それで……」

私はぎゅっと、正宗さんの手を握った。

「教えて下さい。正宗さんのお祖父さんやお祖母さん、ご両親がどんな方たちだったのか」

盆』を二人で過ごしましょう。 一緒に、ご馳走を食べて、お酒を飲んで、いっぱいお話しして……そんな風に、 一年に一度の 『お

だもの。他には、 家の仏壇には、 お義母さんがお好きだったという桃。 綺麗な菊の花を供えた。 真っ白い菊の花は、 お花屋さんで正宗さんと一緒に選ん

そして、 お祖父さんがお好きだったエビの天ぷらを始めとする今夜のお夕飯を並べ

それから、お義父さんがお好きだったというビール。

と思い出せない……ということだったので、代わりと言ってはなんだけど、お祖母さんのお好きだっ ちなみに、正宗さんが小学生の頃に亡くなったというお祖母さんのお好きだった食べ物は、ちょっ

枝垂れ桜の花びらで作った塩漬けをお茶に浮かべた。

それらを全て仏壇に供える。

おかげで今日のお仏壇はとってもにぎやか

から良いよね! うん‼ う、うーん……。ちょっとやりすぎたかなぁ……? でも、これはご先祖様への感謝の気持ちだ

に火をつけた。

そして夕飯の前、 まだ明るい夕方の庭先で、 昼間に正宗さんとスーパーで買ってきた「おがら」

· '

これは迎え火だ。

白い煙が、 ゆっくりと夏の空に立ち昇っていく。

それは、「ここが、あなたの帰る家だよ」と、亡くなった人を呼んでいるように見えた。

その日の夕飯はご馳走ですー

のサラダに、枝豆、エビの天ぷらに、イカ天に、野菜のかき揚げ。 牛肉のステーキはニンニクをたっぷりきかせて、ジューシーに焼き上げた。 エビでダシをとったお味噌汁に、家庭菜園でとれたキュウリの浅漬け。同じく家で作ったトマト マグロとサーモンのお刺身もある。

それから、ぴかぴかの炊きたてご飯! 飲み物はビールに日本酒!

我ながら、 すごいボリュームだ……。ちょっと作り過ぎちゃった気もするけど、

いっか! だってお盆だもん!!

それに……

「美味しいですね」

ほら、正宗さんも楽しそうに笑ってくれているから……

オールオッケーなのです!

ちゃーんとお供えしています) お供えしていた桃をいただいて……(あ、 ご馳走をたらふく食べて(エビのお味噌汁、美味しかったぁ……!)、デザートには、 もちろん全部じゃないですよ! お義母さんたちの分は お仏壇に

んやお祖母さん、 残った枝豆や漬物、トマトサラダを肴にお酒を飲みながら、 ご両親の話をしてくれた。 正宗さんは、 ぽつぽつと、 お祖父さ

さんが遊びに来るたび、手作りのカリントウをくれたって。 厳しくて、いつも怖い顔をしていたお祖父さんだったけど、お酒を飲むと陽気になったんだって。 お祖父さんはお酒が好きで、特にエビのお刺身を肴に日本酒をくーっとやるのが好きだったこと。 いつもにこにこと微笑んでいて、とても優しかったって。まだ小学生だった正宗

「あれは……美味しかったですねぇ……」

そんな風に目を細めて微笑む正宗さんに、 胸がキュウン、 と締めつけられた。

手作りしてくれたって。 お義母さんもお祖母さんと同じく、 とっても料理が上手だったんだって。お菓子なんかも、

りに剥いてあげてたんだって。だから正宗さん、 ふふ……。なんだか可愛い人だったんですね、お義母さん。お会いしたかったなあ。 だけど、果物の皮を剥いたりするのだけはなぜか苦手で、正宗さんやお義父さんが、 果物の皮を剥くのがお上手なんですねー V

あまり構ってはもらえなかった……と正宗さんは言う。 そして、お義父さんは正宗さんと同じく学校の先生をされていたらしい。 いつも仕事で忙しくて

慨深くおっしゃっていたって。 だけど、夕飯の後、ビールを飲みながら……『いつかお前と、 酒を飲みたいなあ……』

成長した息子と一緒にお酒を飲む日を、 お義父さんは楽しみにしていたんですね

「それは……、叶いませんでしたが」

正宗さんは少し寂しそうに、 そう言った。

お義父さんとお義母さんは、正宗さんが高校生のとき、 事故で亡くなった。

きっと、 息子と一緒に晩酌……。そんなお義父さんの夢は叶わなかったけれど。 今、お義父さんも一緒に飲んでいらっしゃいますよ……!」

切なくて泣きそうな気持ちを堪え、私はにっこりと笑った。

「……はい」

仏壇にお供えしたビールは、 正宗さんがコップに注いでいた。

いていると思います。 自分も一緒にお酒を飲みたかった……っていう、正宗さんの気持ちはきっと、 お義父さんにも届

お盆から三日経った、八月十六日のこと。

迎え火は、 早く帰ってきて……という気持ちを込めてまだ明るい夕方に

送り火は、 まだ帰らないで……という気持ちを込めて、 日が落ちてから焚くんだって。

私たちもこの日、 いつもよりゆっくりと夕飯を食べてから、庭に下りた。

「おがら」を焚いて、縁側に腰掛けながら立ち昇る煙を見つめる正宗さんは今、 なにを想っている

だろう。なにを想って、正宗さんは……

今まで何度、一人でこの煙を見つめたのだろう。

私は送り火の煙を見つめる正宗さんの横顔を見て、 上手く言葉にはできないけれど… ·無性

に……無性に、正宗さんを抱きしめたい衝動に駆られた。

「……千鶴さん……?」

ぎゅっと、隣に座る正宗さんの腰にしがみつく。

感傷に浸っているんだ、私……-

寂しいのは、今までずっと寂しかったのは……、私じゃなくて、正宗さんなのに……

------一人になった、 初めの年は……」

#### 立ち読みサンプルはここま

しがみつく私の頭をぽんぽんと撫でながら、 正宗さんは静かな声で言った。

「……なにも、できませんでした」

それまで、 当たり前のように用意されていたお盆の準備。 ご両親を亡くした後は、 お祖父さんが

全てやってくれたんだって。

でも、そのお祖父さんも亡くなって、一人になったとき。

なにを供えていいのかも、わからなくて……

人。 この家で夏を過ごしたって。

「……今思えば、 人に聞くなり、 調べるなり……。 いくらだってやりようはあったんでしょうけ

た姿を思い出しながら、 次の年からは、 ちゃんとお墓参りをして、買ってきたお供え物を供えて、 迎え火と送り火を焚いたって。 お祖父さんがやってい

「……あのとき、初めて……。穏やかな気持ちで、両親や……祖父の死を受け入れられた気がします」

そして、 お葬式のときは、 時折襲い掛かる悲しみや寂しさを経て、やっと…… ただただ時が過ぎていったって。

やっと、 静かな気持ちで、 故人に手を合わせることができるようになったと、 正宗さんは静かな

声で語る。

「……っ」

·····う、 ううううう・・・・・

堪え切れず、私の目から涙が零れた。

「……千鶴さん……?」

なんでかな……? 悲しい……のとは少し違うんだ。

もちろん、嬉しいわけじゃない。なのに、切なくて……。少しだけ、 苦しくて……

胸が、寂しさで締めつけられるようになるのは……、 どうしてなんだろう……?

<sup>-</sup>------今年は……千鶴さんがいてくれて良かった……」

正宗さんはそう言って、 私を抱きしめてくれた。

ーううー」

その言葉に、 また涙が溢れてくる。

私は少しでも、この人の……愛しいこの人の支えになれているのかな……

「ありがとう……。 千鶴さん……」

「……つ、 うつ .....」

私たちは抱き合って、寄り添いながら……

夜空に消えていく送り火の白煙を、 見つめていた。

57 ひよくれんり3